

## ねがいのいえニュース 第25号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2011年8月20日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



お元気ですか。災害はあまりにもつらいことでしたが、復興に臨む人々や支える人たちの優しさを見て励まされる日々です。ねがいのいえはこの3ヶ月の間に、スタッフの退職休職をはじめ、たくさんの出来事が重なりました。その報告と、今後へ向けての今の想いをお伝えします。

### 休職者・退職者が続きご迷惑をおかけします。

今年に入り女性スタッフの妊娠が相次ぎ、主力で活躍していたスタッフが入浴介助や行動障害への対応に入れなくなりました。また今後も家庭の事情などで退職するスタッフもあり、なんとか夏休みまでがんばってもらっています。女性の利用者には大変ご迷惑をおかけしていますが、入浴や宿泊を必要としている方々には、他に頼れる事業所を探していただけるようお願いしているところです。これほど一度に重なるのは設立以来初めてという大ピンチですが、社会全体もいつ何が起きるかわからない状況ですので、制度を理解し地域とつながってくださるようお願いいたします。

### 今年もやります。「街のナーステーション」助成金決定

昨年度、独立行政法人福祉医療機構の助成金をいただいて看護師を派遣する事業を行いました。今年度も決定しました。すでに何名かの看護師が集まっています。

今まであらゆる制度からもれて支援が存在しなかった分野で、支援の方法があることを告知したことによって、想像もしていなかった大変な相談が次々と訪れています。この支援は本当に必要なのだ毎日痛感しています。

今年度はいよいよ制度化への訴えを大きく出して行こうと思っています。利用を希望する方、登録して派遣に応じたいという看護師の方、一緒に取り組みましょう。

### 「埼玉よりどころねっと」いよいよ活動開始

地域に支援者を増やしていくためのネットワーク活動が具体的に始まりました。現場の最前線で日々苦勞しながら利用者を支えている職員を丁寧に育てていくために、そして、当事者として大変な毎日を送られているご本人や家族のみなさまに、どのようなシステムがあればみんなが支えられるのかを考えるきっかけにするために、全国から優れた実践家を招いて取り組みを報告していただ

く連続講座です。

初回は東松山の曾根直樹氏から、「自立支援法の目的はサービスを提供することではなく、自立と共生の社会を作ること」なのだとお話がありました。「利用者をサービスづけにしたり、事業者が収入を得ることを目的にしてしまうと、共生社会からは遠ざかります。間違った方向へ向かわないことを祈っています」というお言葉をいただきました。

2回目は東京の「ゆきわりそう」代表、姥山寛代氏から障害者の文化活動についてお聞きし、プロの指導者からコーチしてもらうことによって、どんなに重い障害があっても、音楽やスポーツや芸術などで健常者にも勝るほどの成果を出せることを学びました。そして、「障害のある人は一生のうち何回、本当の歓喜を体験するでしょうか」という言葉に、私たちの社会が誰にでも平等の環境と機会を用意していない未熟な社会であることを改めて思い直しました。障害のある人が豊かな人生を送るために必要な選択肢を作るのは、私たち福祉人の役割だと感じます。

連続講座は9月からまた続きます。たくさんの方が参加し一緒に視野を広げ思索を深めていただけるよう祈っています。また、「埼玉よりどころねっと」が正式にNPO法人として発足しましたので、今後はそちらからの報告にシフトしたいと思います。

### 愛知から共生社会を作るための発信

災害後、全国から各団体が被災地へ物資を届けに行ったり、現地にとどまり何が必要かを調査し支援体制を整えるなど、目の覚めるような行動力を発揮している方たちがあります。日々の業務に追われ持ち場を離れることができない者としては、感謝と敬意を表しながら可能な応援をしていきたいと思っています。

被災地の障害者施設で作られている製品を買い付け、全国で販売することで利用者の工賃を確保しようという支援活動も始まりました。イベントで販売所が設けられたり、店舗を持つ施設が販売するなど、拠点もどんどん増えています。「ミンナで買おうプロジェクト」という看板を見かけたらぜひ購入を、店舗をお持ちの団体には販売の協力をお願いします。製品は質の高いものがそろっているとうかがっています。

そのプロジェクトを着想したNPO法人ふわり代表戸枝氏は、「被災地を歩きながら、声や行動が周囲に迷惑をかけるからといって障害者が避難所にいられない、そんな社会であっていいの。私たちはもっと成熟した共生社会を作らなければならないのではないかと改めて考え直した」というお話をされていました。

課題は山積みの今後。出来ることをひとつひとつ積み上げて、成熟した共生社会になるために、みんなが取り組まなければなりません。他人事でいい人などひとりもないことでしょう。

以上、この数か月にあった出来事の報告でした。そしてこれらの体験から学んだこと、ねがいのいえが今後どのような方向性を目指して何を成すのかについて、語ってみたいと思います。



## 構造化一辺倒へ苦言

障害のある人を適切に支援できる人材が足りない。全国の同業者が感じている問題である。支援費制度ができたときに、障害現場の人材育成についてノウハウを持たない国は、高齢者介護のヘルパー資格を義務づけたが、障害者の特性とはまったくかい離していることを誰もがわかっている。わかっているながら誰も対策を立てられずに続いてきた。そしてそれは、人材を育成する方法が誰もわからないからに他ならない。そもそも、難しい障害についての共通理解も対応法も確立していないというのが現実。それぞれの現場で何となく、こうしたらどうだろうという方法で職員は関わってきた、というのが障害福祉の長い歴史だった。

障害は範囲が広い。難しいのは、言葉を持たない方たちの内面理解である。その最も重要な部分を理解する努力を避けて通れば、技法をマニュアル化してしまおうという傾向になりがちである。

しかしどんなに理解が難しくても、それは表現の障害であり、内面でも何も考えていないということはありません。コミュニケーションのハンディがあっても人間とのかかわりであることに変わりはなく、私たち福祉職員は基礎的な人間力を高めることが求められているはずである。

しかも技法は星の数ほどもある。ある人には有効だった方法が、別の人にはあてはまらないこともしばしばある。あまた存在する方法の中から、私たちは何を選びどのようにして、難しい障害のある人と適切に関われる人材を育てたらいいのだろうか。

代表的な技法のひとつに、「構造化」という方法がある。自閉症の人は予定が変わるとパニックを起こすからいつもと同じ順番で行動したり、耳だけの理解は難しいという理由で、日常生活に必要な事柄を絵カードにして提示する、という方法がとられているのは有名な話である。しかしそれはあくまでも行動をわかりやすくするだけで、障害の本質に向き合い人間力を高める方法ではない。また障害の症状も様々なのに、行動障害イコール自閉症と誘導するかのように、行動障害の援助技術は構造化がベストだと言わんばかりである。

構造化でパニックを防ごうという試みはあってもいい。しかし人生は予期しない出来事の連続で成り立っている。初めて出会う状況や予期しなかった出来事に直面し、起きてしまったパニックにはどう対応するのか。

以前に全国の有力者と話した時に、それぞれに任せると職人芸になってしまうという話になった。しかし、職人芸でいいのではないか。われわれの仕事はマニュアル化不能の「心に触れる」分野なのだ。技術を学ぶことを否定はしないが、技術を超えた人間力を育てる方法を模索しなければならぬはずである。養われた感性の差によって、支援を受ける側にとって格差が生じることもある。しかしそれを否定するあまり関わり方のすべてをマニュアル化するのではなく、格差が生まれないような育成方法の確立を目指すべきではないのか。

以前に参加したある会合で、自分の決めた場所から動こうとしない利用者があり、その部屋にはエアコンがついていないため、暑さ厳しい夏の毎日にはスタッフも汗びっしょりになって見守っているというエピソードを語った施設があった。これは決して微笑ましい話ではない。その施設は、こたわりで動けない人を上手に移動させられる方法も人材も所有していないという事実は、命を守

れない重大な問題を抱えているということであり、それを謙虚に受けとめ適切な方法を学ぶ必要がある。そして世の中の多くの団体が、実は同様の状況なのも事実である。

さまざまな場面で汎用性があり、その場ですぐ実践できる関わり方を学ばなければ、現場の職員の困り感は永遠に解決しないだろう。構造化一辺倒に傾こうとしている業界の流れに警鐘を鳴らし、幅広い対応法を学ぶ場を設けよう、というのが自分の持論である。そしてその根幹を成すのは、これまでねがいのいえが取り組んできた「心のケア」なのだということをさらに訴えたい。今後は「心のケア」を軸にしながら、動作法やタッピング療法など実践的な方法をまとめて体験できる研修プログラムを組み立て、「埼玉よりどころねっと」の人材育成研修としてスタートさせたいと思っています。



## 心のケアを超えて

施設に暮らす行動障害の人たちは、突然パニックを起こしたり自分や他人を傷つける行為がいつまでも続く。「心のケア」の大切さに気づいた職員たちは、ひとりひとりに時間をかけて向き合い、悲しみや痛みを理解する関わりを始めている。その研修の取り組みが始まって10年が経ち、その理解者はじょじょに全国へ広がっていった。しかしその生活スタイルを変えることなく心のケアに取り組むのは、毒と薬を一緒に飲むようなものではないだろうか。

ゆきわりそう娯山代表のお話から学んだことを思い出す。重度の障害がありながら、トレーニングを積んでフルマラソンを完走したり、プロの楽団と一緒にホールに立ち第九を合唱する方たちが体験する喜びや達成感は、まるで別世界に住む障害者のようである。

障害を背負って生きる人生が楽ではないことは想像に難くないが、人は健常者であっても、誰しもが苦しみや悲しみを抱えながら生きていく存在である。うまく生きられるかどうかの分かれ道はどこにあるのか。愛する人と出会い、気の合う仲間と過ごし、夢中になれる楽しみを見つけ、人の役に立つ自分としての存在を見出し、人とつながっている絆を確かめることではないか。

健常者でもこれほど充実している人は少ないのではないかと思えるくらい豊かに生きているゆきわりそうの障害者からは、心のケアなどなくても、多少つらくても、悲しんでいる暇などないという声が聞こえてきそうである。

私たち福祉職員はみんな仲間であり顧客を取り合う競争相手ではない。優れた実践家がいたら遠慮なく真似をし資源を共有させていただき、互いにより素晴らしいレベルへ展開していければいい。ねがいのいえは今後、乗馬療法など、ゆきわりそうの資源をお借りすることによってすぐにとりかかれるプログラムを取り入れ、みなさまに豊かな選択肢を用意していきたいと思えます。

スタッフのあこがれは感動のイルカセラピーです。いつかやれたらと夢に見ています。

## 「埼玉よりどころねっと」よりお願い

地域のふれあい拠点として、誰でもが立ち寄ることのできるオープンスペースを作りたいと思っています。貸していただける古民家などをご存知のかた、ぜひともご紹介をお願いします。